11. 乳頭筋異常と僧帽弁前尖にcleftを伴った重症僧帽弁逆流症の1例

大熊麻衣子，山本雅史，藤本善英
松戸裕治，押田成人，椎名由美
今田映美，氷見寿治（君津中央）

症例は53歳男性。呼吸苦，嘔吐を主訴に来院。CTR64％・T-Bil3.7であり，心不全の診断で入院となった。UCGではMRⅣ°・TRⅣ°（⊿PG56mmHg）であり，前尖の軽度prolapseと前後乳頭筋が基部で馬蹄形に癒合し，前乳頭筋が直接前尖に付着するという異常を認めた。両心カテーテルではPAP92/40・PCWP37・CI1.8であり，LVG上左室内腔の形態異常を認めた。心不全改善後，僧帽弁形成術＋三尖弁輪縫縮術施行。術中前尖にcleftを認め，同部位からの逆流と判断し，縫合した。術後，CTR48％と改善した。

12. 低血圧と好酸球増加にて診断に至ったACTH単独欠損症の1例

井藤葉子，山内雅人，今井　均
（千葉労災）

症例は60歳男性。感冒症状にて処方を受けていたが，嘔気，筋肉痛，全身倦怠感が出現し，GOT，GPT，LDH，CPK等の高値を認めたため薬剤性の横紋金融解症が疑われた。悪心，嘔吐強くなり当院に紹介入院。上部消化管内視鏡，頭部，胸部，腹部CT，Gaシンチなどにて異常を認めなかった。収縮期血圧が80台の低血圧，好酸球高値を認め，cortisol，ACTHの測定にてACTH欠損による副腎不全，さらに4者負荷試験にてACTH単独欠損症と診断がついた1例を報告する。

13. リステリアによる人工血管への感染および化膿性椎間板炎が疑われた1例

野島愛佳，栗山根廣，志鎌伸昭
寺野　隆，高橋長裕，平井　昭
（千葉市立青葉）

症例は81歳男性。2003年10月，胸部大動脈瘤および狭心症にて人工血管置換術および冠動脈バイパス術を施行した。2004年4月，胃潰瘍からの出血のための当院緊急入院した。その後発熱を認め，血液培養よりListeria monocytogenesが検出された。GaシンチおよびFDG-PETで大動脈弓部の人工血管部と腰椎椎間板に集積を認め，同部位のリステリア感染と考えABPCを投与した。治療効果判定にはGaシンチおよびPDG-PETが有用であった。

14. 発作性心房細動に対する同側肺静脈一括燃灼隔離術を施行後に麻痺性胃拡張を来たした1例

堀　泰彦，吉崎　彰，濱　義之
長橋達郎，高田博之
（多摩南部地域）

症例は60歳男性。平成14年11月頃より眩暈を自覚するようになり，近医で発作性心房と診断され抗不整脈剤の投与開始となったが，洞機能不全の合併もあり当院に紹介された。心電図でP on T状のPACが頻発し，それから心房細動へ移行しており，心房細動から洞調律への回復時に最長3.1秒の心停止を認めた。

平成16年1月30日肺静脈起源の異所性興奮に対してカテーテルアブレーションを行った。左肺静脈（共通管）からの異所性興奮に対して肺静脈燃灼隔離術と右上下肺静脈の一括隔離術を施行し，心房細動の出現は認めなくなるも原因不明の麻痺性胃拡張を起こした。

15. 当院における塩酸ニフェカラントの使用経験

大久保健二，滝沢太一，市川　崇
（国保成東）

純粋なKチャネル（IKr）遮断薬であるニフェカラントは静注薬として1999年に認可され，難治性VT/Vfに効力を示し，陰性変力作用が無いことから心機能低下例に対しても有用性が高いと考えられている。当院でも難治性VT/Vf症例8例に対して使用し，その有効性・有効量・副作用についても検討した。有効性については8例中2例で頻拍発作停止・8例中4例にDC閾値低下作用・その後の頻拍発作予防は6例中6例であり，高い有効性を得た。有効量については単回静注0.3mg/kg，維持静注0.1～0.3mg/kg/hrで投与し，維持静注において低容量での有効性を認めた。副作用については全例でQT延長・心房細動1例，Ⅰ度AVブロック2例を認めたが重篤な副作用は認めなかった。

16. 「感染性大動脈瘤」診断から治療へのプロセス

大槻しほ，小澤　俊，稲垣雅行
福沢　茂，杉岡充爾，沖野晋一
松野晋太郎　（船橋市立医療）
高原善治，武内重康，茂木健司
西田洋文（同・心臓血管外科）

感染性大動脈瘤は大動脈疾患の中でも比較的まれな疾患であるため，循環器内科医において認知度は低い。しかし症状の進行が早く，診断から治療への経過が遅れると致命的であるため，迅速な対応が必要と考えられる。そこで，当センターでの過去10年間に経験した感染性大動脈瘤の8症例（胸部3例・腹部5例）を検

討し，本疾患に対する診断から治療へのプロセスを考察し，報告する。

17. 保存期腎不全患者に対するCAG後一時透析の有用性

森野知樹，上原雅恵，磯山邦彦
飯嶋義浩，河野行儀，宮沢幸世
鳩貝文彦　（千葉社会保険）

近年糖尿病の増加に伴い，慢性腎不全患者に対しCAGを行わなければならない機会も増えてきている。保存期腎不全患者の腎保護の面から，CAG後一時透析を行うことの有用性を自験例から検討した。

1994年4月～現在までに当院にて行われたCAG症例の中で検査後一時透析を行った保存期腎不全患者を選出し，検査後の腎機能の変化，その後の維持透析導入の有無，合併症の有無などを検討した。CAG後一時透析を行った症例は，特に大きな合併症なども認めず，腎機能を保護することができた。

18. High flow shuntが心機能に与える影響について

上原雅恵，森野知樹，磯山邦彦
飯島義浩，河野行儀，宮沢幸世
鳩貝文彦　（千葉社会保険）

当院では，年間約150人が透析導入となっている。維持透析となった場合，シャント造設術を行っているが，シャントの造設により心臓への負荷が増大する事が予測される為，あらかじめ心エコーにて心機能を評価し，心機能が著しく低下している人に対しててはは表在化動脈の造設を行っている。

今回，実際に軽度心機能の低下した人に対しシャント手術を行った場合，どの程度の心負荷がかかるのかスワンガンツカテーテルを用いて，検査を行った。又，心機能の著しく低下した人に対しシャント閉鎖術を行い，心負荷がどの程度軽減されたのかを検査し，その後心機能の改善を認められたかを調べたのでここに報告する。

19. PTMCの初期及び長期効果の予測：breath-hold cine MRIを用いた検討

三上陽子，井上寿久，鶴有希子
竹田隆一，福島賢一，徐　基源
粟生田輝，中村精岳，石川隆尉
宮崎　彰　（千葉県循環器病）

【方法】PTMCを施行した23例を対象に，PTMC前，直後，一年以上後にMRIを用いて僧帽弁を評価し初期および長期効果が予測しうるか検討した。

【結果】交連部に中等度以上の硬化を認めた例では同部に裂開は得られなかった。乳頭筋の付着を認めるものは初期の弁口増加が少なく，長期の弁口の減少が大きかった。

【結語】breath-hold cine MRIを用いた僧帽弁の評価は，PTMCの初期および長期効果を予測する上で有用であった。

20. 心房細動63名の75か月：SIOSAIスタディ

関谷貞三郎（東総循環器研究所）

日常診療でよく遭遇する心房細動は，脳梗塞の危険因子として広く知られている。今回，当院での心房細動症例63名を治療法別に75か月間フォローした結果，ワーファリン療法の優位性が示された。

【対象と方法】1997年7月に登録し2003年10月までフォロー。ワーファリン使用群30名（W），抗血小板薬使用群27名（AP），無治療群6名（N）の3群での脳血管障害と突然死の発生をイベントとしてカウントした。

【結果】13名にイベント発生を認め，年間発生率はW群で2.3%，AP群で5.3%，N群で6.3%であった。また，イベント発生例では，全例他の危険因子を有していた。

21. 診療・研究支援のためのWEBアプリケーション

中黒　毅（国立病院機構千葉東）

千葉東病院は本年4月に千葉東療養所の機能と腎疾患専門施設としての機能を持った病院として統廃合された。当院の診療・研究支援のためのWEBアプリケーションを紹介する。

(1) 年齢，性別，コレステロール値など冠動脈疾患危険因子から6年後の生涯のリスクを計算。J-LITのデータで作成。

(2) IgA腎症の腎生検病理所見から，ステロイド使用，不使用の際の腎予後を予測。佐倉病院のデータで作成。他施設の登録をお願いし，Validation Studyのデータが得られるようにした。

今後，有用性を検討，改良していく予定である。

22. 新たな疾患概念の確立：ステロイド反応性バージャー病

内藤篤彦，南野　徹，宮原啓史
前川潤平，舘野　馨，永井敏雄
小室一成　（千大院）

バージャー病は難治性の血管炎としてよく知られている疾患であるが，その原因については明らかでない。今回我々は，臨床的にバージャー病と診断されうる症例の中でステロイド治療に対して反応の良好な新しい疾患群が存在することを明らかにしたので報告する。